

【43】地下街は大洪水の受け皿

先頃亡くなった文学者の筒井康隆の「現代語裏辞典」では、見出し語「地下街」の説明が“大洪水の受け皿”とあるので、一言にしたのが冒頭の文です。

今、東京の大繁華街の渋谷では、有名になった「ヒカリエ」など高さ 200m 前後の超高層ビルが次々と立ち上がり、渋谷駅や鉄道網も改造されるなどの大規模な開発事業が進められています。

防災的見地から気になることは多々ありますが、水害に限っても、渋谷という土地はその名の如く台地に河川（渋谷川）が侵食して出来た谷底だということです。

それは赤坂見附の方から、台地の国道 246 号青山通りの浅い地下を走ってきた地下鉄「銀座線」が、渋谷の谷に顔を出すと地上 3 階の高架橋になっていることからわかります。

ところが、近年開通した新宿方向からやってくる地下鉄「副都心線」の渋谷駅の線路やホームは、地上から深さ 20m 以上の地下 4 階にあります。

又、谷底を流れていた渋谷川は渋谷駅東口広場では、昭和の初めから蓋をされて暗渠になっていたのですが、広場を半分近くつぶして建てられた超高層ビルの地下室の一部と化してしまいました。

流石に河川管理者の東京都は、河川法による河川指定をはずしたようですが、川を流れてくる水には関係ないことです。

その代わりというわけか、ビルの一面に洪水の地下貯留池が設けられましたが、その容量はわずか 4,000 立方メートルとのことです。

先日、渋谷の地下鉄や東急半蔵門線の地下駅のコンコース、ハチ公広場の地下に古くからある地下街、それを結ぶ地下道、それに向けて出入口を開いているビルの地下室など、地下迷路のような "地下都市" を探検してきました。

これらの地下施設は複雑に繋がっており、いくら地下鉄や鉄道が自分の出入口階段に防水設備があるからといって、他の出入口が無数にあります。

近年、日本各地で珍しくも無くなった日雨量 500～600mm、時間雨量 100～120mm という豪雨のときは、地下都市は浸水のおそれ大と云わねばなりません。

土木屋マインドで、地下都市の空間容積を目分量で勘定してみたら、ビルの地下室を別にしても数十万立方メートルもあります。すなわち豪雨や渋谷川の洪水氾濫で渋谷の谷が浸水すると、これらの地下空間は結果的に巨大な雨水貯留池として機能することになりそうです。

皮肉なことですが地表の浸水は軽減されるでしょう。

冒頭の筒井の言は、この事を予測して言ったのでしょうか？

いずれにしても、渋谷で豪雨に見舞われたときは、地下から地表へ直ちに脱出すべきです。又、大雨の予警報が出たときには渋谷に近寄らないのが無難です。